

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

第 4 回若者研究会

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時： 2021 年 9 月 2 日（日） 13:00～16:00

場所： オンライン会議

テーマ： 「互酬性・優劣関係・需要と供給」について

報告者：

1) 上野将敬（近畿大学）

レビュー「霊長類学における互酬性・優劣関係・需要と供給」

研究発表「ヒト以外の霊長類における互酬性の形成メカニズム」

2) 生駒美樹（AA 研特別研究員，東京外国語大学）

レビュー「文化人類学における互酬性・優劣関係・需要と供給」

研究発表「互酬性と負債：ミャンマーにおけるチャ摘みの事例から」

3. キーワードのレビューと概説

霊長類学における「互酬性・優劣関係・需要と供給」

（上野将敬）

霊長類研究では、2 者間で相手に利益を与えあい、相互に利益を得る関係性を互酬性（互惠性）と呼ぶ。霊長類種の多くは集団内の個体に毛づくろいを行う。毛づくろいを受けた個体は、寄生虫の除去やストレスの減少といった利益を得られる（Onishi et al. 2013; Ueno et al. 2015）。個体間の毛づくろいには互酬性があり、相手に毛づくろいを行うと、相手からもお返しに毛づくろいが行われる傾向がある。さらに、毛づくろいの返報として、毛づくろい以外にも、攻撃交渉時の支援、アカンボウへのアクセス、交尾機会の獲得、冬

期の身体接触など様々な利益を得ることもできる（上野 2016）。このように、霊長類の社会では、毛づくろいを中心として様々な形で互酬性が形成されている。

霊長類集団における個体間には、多くの場合優劣関係が存在する。例えばニホンザルでは、優位個体は劣位個体に攻撃を行う一方、劣位個体は優位個体に反撃することは難しい。霊長類研究では、個体間の攻撃交渉の観察以外にも、2 個体の中間付近にある食物を、どちらの個体がとるのかを調べることによって優劣関係を評価してきた。

霊長類の毛づくろいに関する互酬性は、需要と供給の影響を受ける。ニホンザルの毛づくろいは、優位個体から劣位個体に行われるよりも、劣位個体から優位個体に行われることの方が多い。優位個体は、劣位個体とは異なり、攻撃交渉時の支援や寛容性（攻撃の抑制）といった利益を提供できるためであると考えられる（Seyfarth 1977）。しかし、食物が豊富にあり、優位個体からの寛容性の価値が低い場合には、毛づくろいと毛づくろいの交換が行われる傾向があった（e.g., Barrett et al. 1999）。このように、需要と供給によって、毛づくろいと交換される利益の種類は異なることが示されている。

質疑応答：

- 毛づくろいはヒト以外の霊長類のどの種も行うのか。
→ 一般的にすべての種がおこなう（だが新世界ザルはあまり毛づくろいをしない）。
- 「寛容性」という語は何を意味しているのか。
→ この文脈では「攻撃しないこと」を意味する。
- 毛づくろいについて、毛づくろいの時間だけでなく頻度も指標として扱うか。
→ 頻度を扱うこともある。毛づくろい観察時間中に毛づくろいされた総時間というような形で扱ったりもする。

文化人類学における「互酬性・優劣関係・需要と供給」

（生駒美樹）

本発表では、文化人類学における互酬性の議論をレビューした。人と人との間のモノやサービスのやりとりについて、主流派経済学が形式主義的（formative）立場（限られた手段で最大の利益を追求する抽象化された人間像「経済人(Homo Economicus)」が人間社会に普遍的に有効であるとする立場）をとる一方、文化人類学では自然環境や社会的・文化的価値、歴史のもつ意味を重視する実体主義的（substantive）立場から、世界各地の事例を研究してきた。

文化人類学における人と人との間のモノやサービスのやりとりに関する研究の嚆矢であり、今なお影響力を持つのが、マルセル・モース（Marcel Mauss）の「贈与論」[2014（1925）]である。モースは、世界各地の民族誌情報に基づく比較研究により、贈与が、

三つの義務（与える義務、受け取る義務、お返しする義務）から成り立つ交換であること、宗教や政治、経済、社会に関わる「全体的な社会現象」であること、当事者間に優劣関係や負い目を生み出すものであることを指摘した。

また、経済史学者のカール・ポランニー (Karl Polanyi) は、非市場社会の研究は実体主義的に行うべきであると主張し、文化人類学に大きな影響を与えた。ポランニーは、モノのやりとりの原理によって社会が統合されているとし、下記の三つに類型化した [ポランニー1975(1957)、2005(1977)]。

①互酬性 (reciprocity) 対照的な集団間や個人間での物財やサービスの移動

②再分配 (exchange) 物財が中心に集められそれが再び周辺へと分配されること

③交換 (exchange) 市場経済システムにおける所有者間での財やサービスの相互移動

マーシャル・サーリンス (Marshall Sahlins) は、社会関係の距離に応じて互酬性を 3 タイプに分類し、社会関係と互酬性の形態は相互に関連していることを指摘した [サーリンス 1984 (1972)]。

①一般化された互酬性 (generalized reciprocity) は、近親者間にみられる相手に対して惜しみなく与える愛他主義的行為で、物財は持つものから持たざるものへと長期に渡り一方的に移動する

②均衡のとれた互酬性 (balanced reciprocity) は、①と③の中間に位置する友人関係や姻族間などにみられる直接的な交換で、短い期間内に同等の価値のものが返礼されるため、物財は双方向に移動する

③否定的互酬性 (generalized reciprocity) は、利害が対立する二者間における非人格的な関係にみられる、功利主義的な利益を求める行為

また、文化人類学の互酬性議論では、負債 (debt) も重要なキーワードとして取り上げられてきた。ここでの負債は、貨幣価値に換算された経済的な負債だけではなく、借りや負い目、恩などの社会的な負債も含む。エドモンド・リーチ (Edmund Leach)

[1991(1982)] は、外部の観察者が互酬関係と理解する関係は、内部の行為者にとって権利と義務から成り立つ負債の網の目だとし、すべての社会関係には負債が伴うと指摘した。また、社会関係は、負債だけでなく力の構造でもあり、対称的な交換は対等な関係を、不平等な交換は優劣関係を示すものであるとする。

一方、こうした従来の贈与交換や互酬性議論に対する批判もある。それは、人間同士の関わりをある種の交換と想定しているという点では、文化人類学の従来の贈与交換や互酬性に関する議論も主流派経済学のそれと同じであるという批判である。デヴィッド・グレーバー (David Graeber) [2016(2011)]は、「交換」(対等だとみなされる二者間における等価のやりとり)、「ヒエラルキー」(優劣のある二者間における慣習的で質の異なるもののやりとり)、「コミュニズム」(各々の能力と必要に応じた人間の社交性の基盤となるやりとり)という経済的関係の基盤となるモラルの三原理を提唱し、「交換」の相対化を図った。そのうえで、負債は完遂に至らぬ「交換」であり、あくまで「交換」の産物である

が、負債を結節点にこれら諸原理が錯綜すると指摘する。また、北村光二 [1996、2019]、太田至 [2021] は、モノのやり取りを、互酬性や負債ではなく、その授受をめぐる相互交渉を通して合意形成する行為として分析する必要性を指摘している。

質疑応答：

- 人間社会で順位が生じるような場合は、発表されたキーワードと関連した議論では特にどれと関係があるか。
→ 再分配。集められた資源をどう分配するかによって格差が生じることがある（近代国家の税収システムなどが再分配の一例）。
- 霊長類学だと個体間のやり取りを観察するが、人類学では全体の制度のようなものを対象にしがちだと感じた。人類学でも個体間のやりとりも扱うか。
→ サーリンズの理論などは集団間だけでなく個人間でも成り立つ。

総合討論

<互酬性の捉え方：「近代経済学」との関連>

- 近代経済学とは異なる観点から互酬性を調べるという人類学の視点は興味深いが、具体的にはどういう視点なのか。
→ 近代経済学あるいは主流派経済学と呼ばれる学問では、人間の個体は損失を最小にして効用を最大化することを前提としてきた。それに対して、経済的な価値の認められないようなものをお互いに交換し合う場合のように、経済学の枠組みでは説明できないような活動もある。そうしたものを扱う経済人類学では、近代経済学とは異なる視点を持っている。その点が霊長類学の視点とは異なると思う。
→ 近代経済学のような発想でなく、物質交換を通して広範かつ持続的なネットワークを作るといった観点から贈与や同盟といった経済活動を考えることができるのではないか。
- 霊長類学では、いわゆる近代経済学的な分析を行っているが、それとは異なる視点での分析はされていないのか。
→ 個体のコスト・ベネフィットだけではない関係を重視する議論は霊長類学でも行われてきている。動物の社会が進化してきた背景には合理的なメカニズムがあると考えられる社会生物学の枠組みで検証が行われてきたが、それでは説明できないものが霊長類の行動にはあるだろうという議論はある。
→ 毛づくろいをコスト・ベネフィットの視点からではなく、感情や関係といった視点から考えることもできる。例えば、毛づくろいを通して感情的にポジティブな関係を築いて、その関係に基づいて違う行動が生起するという事は考えられて、そのよ

うな文脈では、コスト・ベネフィットとは違う視点で考えることになる。

- 毛づくろいの研究では、毛づくろいをされる側の利益に関する議論が多いが、毛づくろいする側の視点あるいは精神的な面に関する研究はあるか。
→ 毛づくろいする側にも、毛づくろいをすることによって心理的な快楽や落ち着きが得られるという研究はある。ただ、心理的に良いことを個体の利益とみなしていいのかは議論すべき点である。

4. 研究発表

「ヒト以外の霊長類における互酬性の形成メカニズム」

(上野将敬)

霊長類を対象とした研究において、毛づくろいの互酬性の形成メカニズムが議論されている。いくつかの研究では、毛づくろいの互酬性において、短期的な交換の働きが大きいことを示す一方で、短期的な交換よりも長期的な交換が行われていることを示す研究もある。長期的な交換を可能とする仕組みとして、好意的な感情が媒介となっているのではないかと考えられてきた (Schino & Aureli 2009)。

今回の発表者である上野は、岡山県真庭市神庭の滝自然公園付近に生息する勝山ニホンザル集団を対象として、個体間で行われる毛づくろい交渉を観察してきた。好意的な感情を媒介とした交換が行われているのだとすれば、これまでに繰り返し交渉を行ってきた個体間の方が長期的な交換が行われやすいと考えられる。勝山集団では、普段一緒にいることが比較的少ない（親密でない）個体間では、相手から毛づくろいを受けたかどうかを短期的に評価する傾向があった。他方で、普段一緒にいることが多い個体間では、そのような傾向はみられなかった (Ueno et al. 2014)。また、親密な個体に毛づくろいをした後は、毛づくろいをしなかった場合に比べて、ストレス指標が低くなっていた。他方で、親密でない個体間では、毛づくろい後のストレスは毛づくろいをしなかった場合と違いがなかった (Ueno et al. 2015)。以上の結果は、親密な個体間では、好意的な感情を媒介とした毛づくろいの交換が行われていることを示唆している。

今回の研究会では、ヒトとニホンザルの互酬性の類似点や相違点を議論することができた。ヒト以外の霊長類では、好意的な感情が媒介となることで長期的な交換が可能になっているのではないかと考えられた一方で、ヒトでは、紙などの外部記憶媒体を用いることで、やりとりの収支を計算しつつも長期的な交換を行っていた点が興味深いと感じた。ただし、ヒトとヒト以外の霊長類の互酬性にどのような違いがあるかを丁寧に議論するためには、マクロな分析を行っているかミクロな分析を行っているのかに留意して、あるいは分析のレベルをそろえて議論する必要があると考えられた。

質疑応答：

- 親密なペアの関係について、親密とみられる個体間にも優劣関係はみられるか。
→ 親密である／ないサルの間にも優劣関係はある。
- 毛づくろいをしてもらったサルが毛づくろいを返さない場合に、噛まれるような事例はあるか。
→ 観察していない。

「互酬性と負債: ミャンマーにおけるチャ摘みの事例から」

(生駒美樹)

文化人類学では、人と人との間のモノやサービスのやりとりについて、贈与交換や互酬性というキーワードを用いて説明してきた。しかし、先述のように近年こうした議論の見直しが行われている [太田 2021、北村 1996、グレーバー2016]。そこで本発表では、ミャンマー山間部に居住する少数民族パラウン人のチャ農家とチャ摘み労働者の関係について、1) 負債を結節点に諸原理が錯綜する動態的なものとして分析し、2) チャ摘みをめぐる取り決めや慣習、実践を、農家と労働者が共生していくための相互交渉や合意形成の現れとして検討することを試みた。

調査地の P 村では、チャ摘み労働者を集めるために、《支援 (トッ)》という仕組みが用いられている。農家は労働力を確保するために労働者に食品や現金を授受することで《支援》し、チャ摘み労働者は《支援》を受けた農家のチャ園で収穫に従事することで報酬を得て、《支援》を受けたことにより生じた《負債 (ラム)》を返す。このとき二者間でやりとりされる食品や労働力は貨幣価値に換算され、帳簿に記述されている。農家と労働者の間の社会的・経済的優劣に基づく《支援》関係は、両者の共存と生存の基盤でもある。

本発表では、第一に、P 村のある農家と労働者の《支援》関係を検討し、チャの生育状況や市場の動向などによって両者の力関係が日常的にミクロなレベルで調整され揺れ動く様子を示した。第二に、1990 年代半ば以降労働者不足が深刻化するなか、農家と労働者が《支援》をめぐる取り決めや慣習的实践を調整した結果、労働者の《負債》が徐々に減少していったことを示した。第三に、村で用いられているもう一つのチャ摘みの仕組み《労働交換 (カンヴィル)》について検討した。農家と労働者の優劣関係を前提とした《支援》関係と、チャ園所有の有無を問わない二者間の対等な関係を前提とした《労働交換》という二つの異なる仕組みが村内で併用されていることが、農家と労働者の境界や優劣関係を曖昧にしていることを指摘した。

最後の考察では、《支援》関係をめぐる農家と労働者の力関係の揺れ動きが生み出される背景について検討した。《労働交換》は、対等だとみなされる二者間における等価のやりとりである「交換」原理に根差している。一方《支援》をめぐる農家と労働者の関係は

より複雑である。《支援》関係は、農家と労働者の優劣関係を前提としており、二者間でやりとりされるものは性質の異なるものであることから「ヒエラルキー」原理が働いているといえる。しかし、やりとりされるものが貨幣価値に数量化されているために、「交換」原理が働く余地が残される。1990 年代初頭以降の労働者不足によりチャ摘みの仕組みやその運用実践が労働者にとって有利なものに調整され、労働者の《負債》が減少していった。その結果、農家と労働者の二者間に働く「ヒエラルキー」の原理が徐々に弱まり、対等な二者関係に基づく「交換」原理が優勢になっていったと考えられる。このように、《支援》をめぐる農家と労働者の関係は、社会的・経済的優劣関係を前提としているものの、決して固定的なものではなく負債を結節点に揺れ動いている。また、農家と労働者は、二者間の《負債》、チャの生育状況や市場の動向、労働力需要などに変化が生じるたびに、チャ摘みの仕組みやその運用に関わる慣習的な行為を交渉し調整することで、共生を模索し続けてきたと考えられる。

霊長類学と文化人類学の共同研究を行うにあたり、今回の研究会を通して考えたことは、ヒトとサルの優劣あるいは順位の在り方の違いである。サルの優劣や順位は、主にケンカの強さという基準で決定するが、人間社会では場面や状況によって複数の基準が併存する（例えば、優劣ある関係や対等な関係が併存するなど）。また、ヒトは、固定的な優劣関係に基づく画一的な対応ではなく、直面する課題や状況のなかで、相互応答的に行為を接続することで共存を模索するが、サルは劣位個体が一方的にコンフリクト回避行動をとる傾向強いように感じられる。ヒトとサルの優劣関係や順位のあり方を、相互応答的な行為接続に着目し比較検討することは、霊長類学と文化人類学の研究を架橋する上でも重要な視座となるのではないか。

質疑応答：

- チャ摘みにおいて、雇用者と労働者が互いをごまかすことはあるのか。
→ 支援関係においてはごまかすことをしない、ということが重要視されている。

総合討論

<互酬性について>

- 霊長類学では、毛づくろい相手が親密か否かに応じて互酬性のあり方が違い、「相手の態度に基づく互惠性 (Attitudinal reciprocity)」を支持するような結果が得られているが、人類学では交渉相手の違いは互酬性に影響するのか。
→ 社会的距離や親しさの距離によって互酬性のあり方が異なるという議論は人類学でもある。
→ 人の場合は、親しいからこそ非協力的にするという行為がみられ、必ずしも距離

の近さが協力／非協力とも結びついていない。人類学ではこのような近しい親密な人々のあいだでみられるやり取りを贈与経済 (gift economy) として研究し、貨幣価値のある商品交換 (commodity exchange) と区別してきた。

→ 親密な人々で行われる贈与経済という見方は、比較的互いの顔の見える関係から成り立つゲマインシャフトと、そうでない国家などのゲゼルシャフトというような共同体の区別とも対応する。

- 生物市場原理の考え方では、毛づくろいはニホンザル全員が同じ価値のあるものだと共有しているのか。
→ ミクロにみると違うだろうと思っている。毛づくろいがうまいかどうかなど、1 頭ごとに見ると違いがあると思う。
→ 毛づくろいと「交換」されるものをどれだけ必要とするかは個体差があるので、毛づくろいの価値は画一的なものではないのではないかな。
- 2 個体の毛づくろいのやり取りについて、凝集性が高い種とチンパンジーのように離合集散する種では、相互行為のあり方や、分配、支援は別のメカニズムや理屈に違いがないだろうか。
→ ニホンザルの群れオスと群れ外オスの比較だと、群れ外オスは凝集性が低いので次に同じ個体と会える確証がないこともある。そういう場合は、より短期的に互恵性を成立させようとしていて、次の交渉機会があるかどうかは、互恵性のあり方に影響しそうな気がする。

<非協力者への対応について>

- 人類学において、他人に協力しないあるいは利益にただ乗りする人にたいしてどういう対応がとられているのか。
→ 私の調査地 (ヨーロッパ) では、行為はあくまで自由な意思に基づいているので、やり損という考えはあまりしない。やり損という表現には、観察者の視線が入っているのではないかな。
→ ピグミーの人たちは、以前の交渉を覚えていることもあるが、その場でフレームを設定し、限定的なタイムスケールの中でやり取りをしている。
→ ピグミーの人たちの分配は、単なる平等を目指した分配ではなく、コミュニケーションの側面があり、量やコスト・ベネフィットに還元できない関係がある。

<サルの優劣関係について>

- 人間の場合は場面や状況に応じて異なる順位や優劣の基準があるが、霊長類の優劣あるいは順位の基準は、ケンカの強さ以外にもあるのか。
→ 順位は、ケンカにおける勝ち負けによって記述されてきた。優劣関係もそれを前提にしている。

→ サルでも、ケンカには弱いけど偉そうにしているとか交渉の主導権を握っている個体がいるという印象はあり、優劣関係の基準は一つではない気がする。

→ 霊長類学では、優位／劣位という関係が固定的にとらえられている点が、人類学と違う。

<個で分析するか/集団で分析するか>

- 人の社会を対象とした研究でも、社会というマクロなものを想定してその中で分析を行うトップダウン的な考え方と、個人間のミクロな相互行為を見ることで社会がどうやってできていくかを捉えるボトムアップ的な考え方がある。霊長類学ではどの種であっても後者のような考え方をするのか。

→ 集団として分析するか、個として分析するかということにかかわるが、ミクロなところからデータを積み上げていくということをする。分析は個体の行動を単位として行う。

→ ミクロ/マクロの視点というのは時々聞くが、誰が何をやったかという行動を記録、分析するしかない思ってしまう。集合体として記述するってどういうことなのかということが分からない。

→ 集団の中の個という発想は、現在の自然科学ではかけている点で、検討していく必要はあると思う。

- 人類学では個体差はどう捉えられているのか。

→ 人はいろいろなカテゴリーを形成するので、そのカテゴリーの中でのやり取りを見ると、自分が論じたいカテゴリーについて議論することができる。

→ 基本的には観察者が見た個体（個人）が行った一連の相互行為は、特異なケースであるとともにその社会を一般化するケースでもあるという風に語られているのではないか。

→ 霊長類の場合は個が基準になる。1 対 1 ではなくて、1 対多とか、多対多という視点が必要かもしれない。

(以上)